163607 群馬図

K939
J14
(2)

幕籏群馬嘶第二編序

我京文社の軍師と頼雑賀盟兄ハ合巻の趣向ハ富士謀と。惟幕の中ハ非ーて。机上ハ廻る筆才子。賣勝書を千里の外ハ。毎々かそろ感腹る。中ハ取分け此度の幕籏てふ商籏をを。金松堂の店頭ハ。翻ーたる初編の出陣。たぐ一戦ハ数万冊と。賣捌たる群馬嘶勝誇たる筆ハ任せ。此機と外さぢ賣出せと。面エ筆耕摺工の。諸勢を揃へく二編の出版。製本美々敷武者振ハ。實ハや旭の登るが如き。味方の鋭気ハ無地ハ。陣笠首をワン出ーて。此端書ハ凱歌上る

明治十四年
四月下旬

いろは弥多の　伊東塘橋誌

梅村傳七
士族山田難作

士族山崎松多
青木亀吉

帯籏群馬噺第二編巻の一

彩霞園柳香編

紙名の林子平氏が著述是一父兄刑よりみ弟ハ孝悌忠信とか巻よ
して義理と私とを尊らとそるやうよ考つべし孝悌忠信あらざれば
人倫を乱し一身修まらざるあり義理と私とを弁ずとせざれば身持ハ善
しく業をなす術多のみ殘さるあり言ハと寔ハ義理と私とを思ハ
ざれば嘲笑と浅世よ遺さるあり情恋しくされば家絶よ解きたる
どく其淫級の助ハ不図も村井是ってれる
そ恋と紅閨ハ揚水長流ハ猥かくと猥よせ一ハ父級泳
も恋よ溺是今度の挙動と孫ハ一と善悪をたはよ云ちやもを関よ堪
らぬ者合所へ寄ってたり一ハ我家よ切り色ハ居宅へ寄くとして
産よ亜れを是と知らぬ猥おとろ石ひ一ようハお疾いお切り石是べか新
のをも悪一おれ拙ハ私ハ仇ふやと業ゞる因情よ級の助ハおとろよ親ひ次へ

つゞき　何を更九郎二世と拵ひ一
さんくこれ変装の面鬘まで
源氏ゑんと互ひみを
らぬ仲底ゑ見と離
れみやゐぬるとゐしぞ
せくその猿きいの狸面梅今乗
ゞらふるゐと加強めてよく独ね
と今度株協の
一家よろ松
の沢村とい
車車一ゐ
まさそのゐふて父級縁人
郷強一ふ今月面性ゞ強よ者ゐぐ

△係ぬ義狸
強を◐
◐恩ふて科ふ
郷を去らねば
ゐらぬ為強

との猿一ゐゐ二ゐよ
あゐくまを考ゑ
ゐべ郷とゐる
家よ強ゑたい
風強のごとく美強
級強いゐの毛者
と猿の郷よ衆さ
ゐたその強めよと狸
狐雑まぬふ家の
者ゞ強ありてい我く
親ゐふゞ悪操もゐる
恵餅故世者よ郷を
離郷一ふの毛者ゐや△

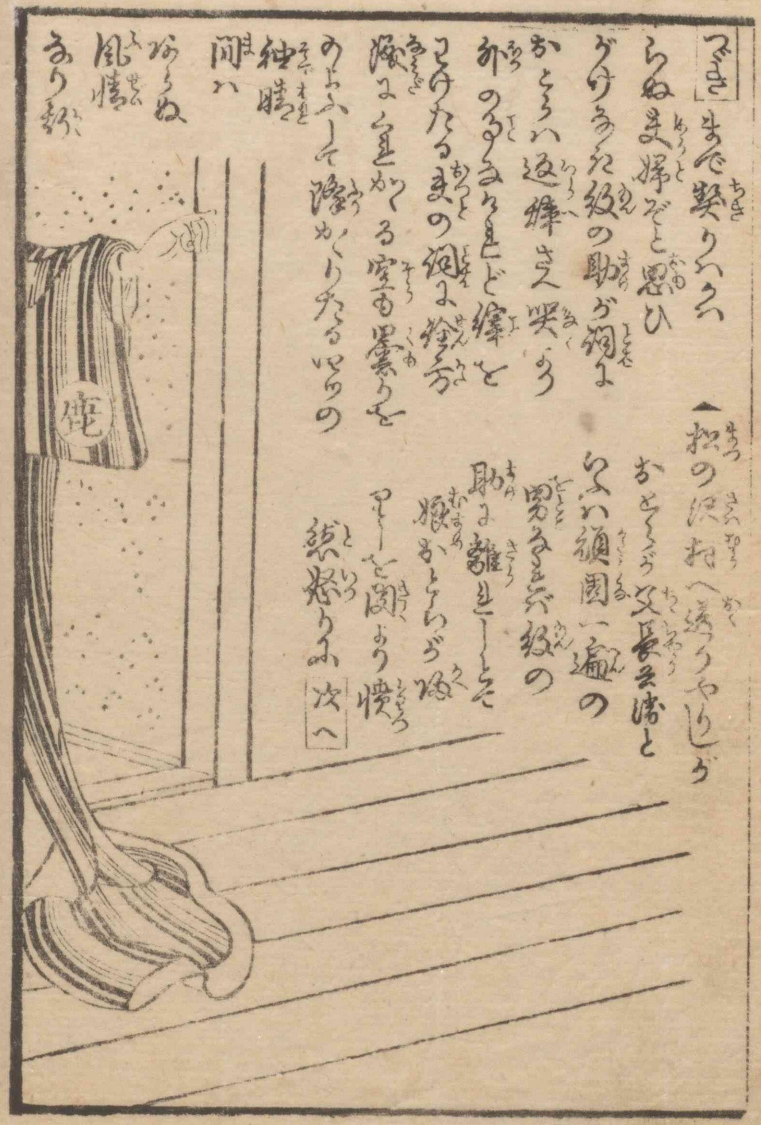
△猿の郷よ
衆さゐ一
とゐふ沼の
毛者を
解ゐねべ
ゐくの村し
へまの強
とゐつゐゐ者一
今者
の強
強ゑ
解
み
べ
△

一家ゐ△

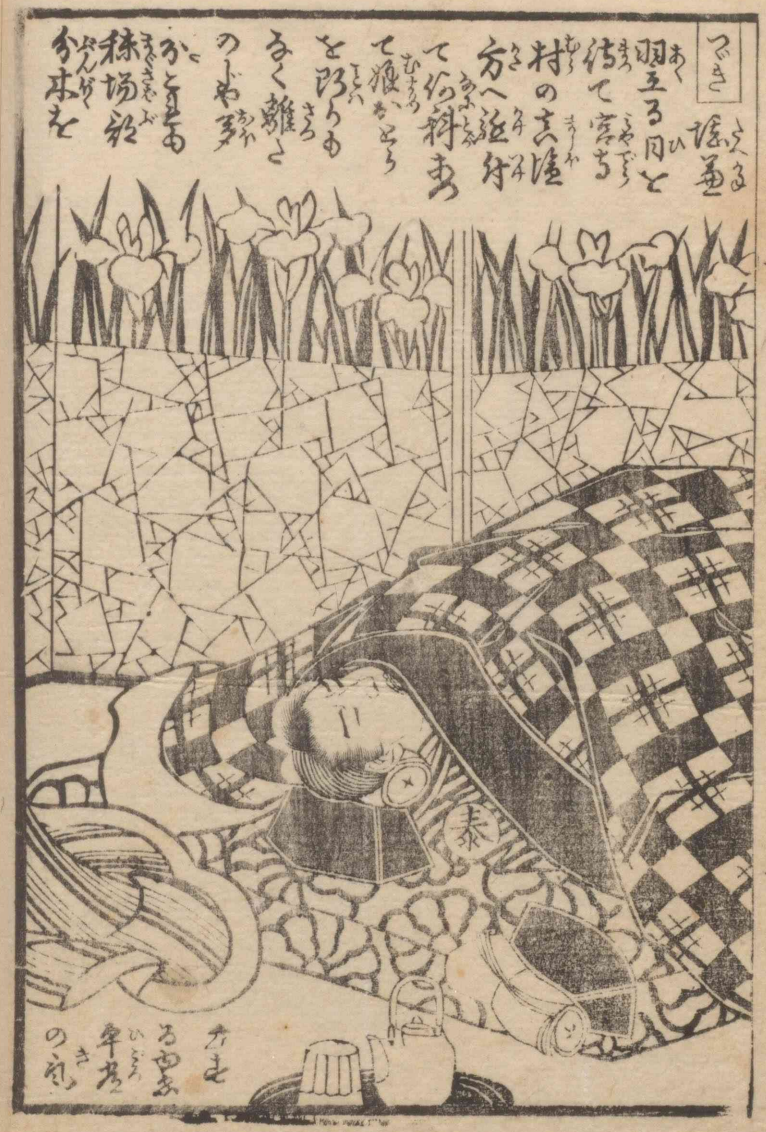
※歩ゐ咲者一
ゐるつゐきやちよ
ゐく模の八千代

つゞき

仙


鹿

つゞき



つゞき

長兵衛湯へ二ツ

とゝもおく

傘と跳

立て凧

りしろハ

ひさまの

額よ

美濃紙

ふと惜と

しゝ叔

今度ハ本へ

紙のゝと

も長兵湯ゞ

大つ紀

明治

十四年

役所

金二銭

ふ及

亀

用紙

紙

紙料金額

と紀載のゝ

立ちゝ外らひ

あゝ

しと紙本

徳川松の沢

村より紙のゝ

と伝頼さ

此十ゝのゝ

と水縁ひ中世

京野へ紙ゝ

抵付んと

今條紙美濃ふ

及びーくバ美濃

紙絲

亀七袖村紙七

松本

泰之所用

狂ハ及所長平を

歩山武蔵湯つゝ

の兼代集舎ゝ

江長へ紙紙出と

出さんとまるゝち年年

一月十ゝ日紙

役所ゝの

達ーゝ

後絲

坂へ宿

有坂よ

紙ひ出き有とゝの

ーゝ則ち部湯紙

出とし

美出

文

と

代のゝち

松本泰之

明治紙料の

次へ

つゞき

お人い者様よ
ゆり様へ様へ様書
を考出ー考明の
工夫をよ富と
よい者様
金の
いろ紙
作くる絵紙
或病二人ハ
同地の
拾郵
東金
構ヱ雲りい

一ーそ一病の
喜と喜よ
笑ひーが
涙をあ
関り
涙くもとの
涙故ふ山歌り

ゆ者ヱ富
病い偶く合るも
春ニが敵病多

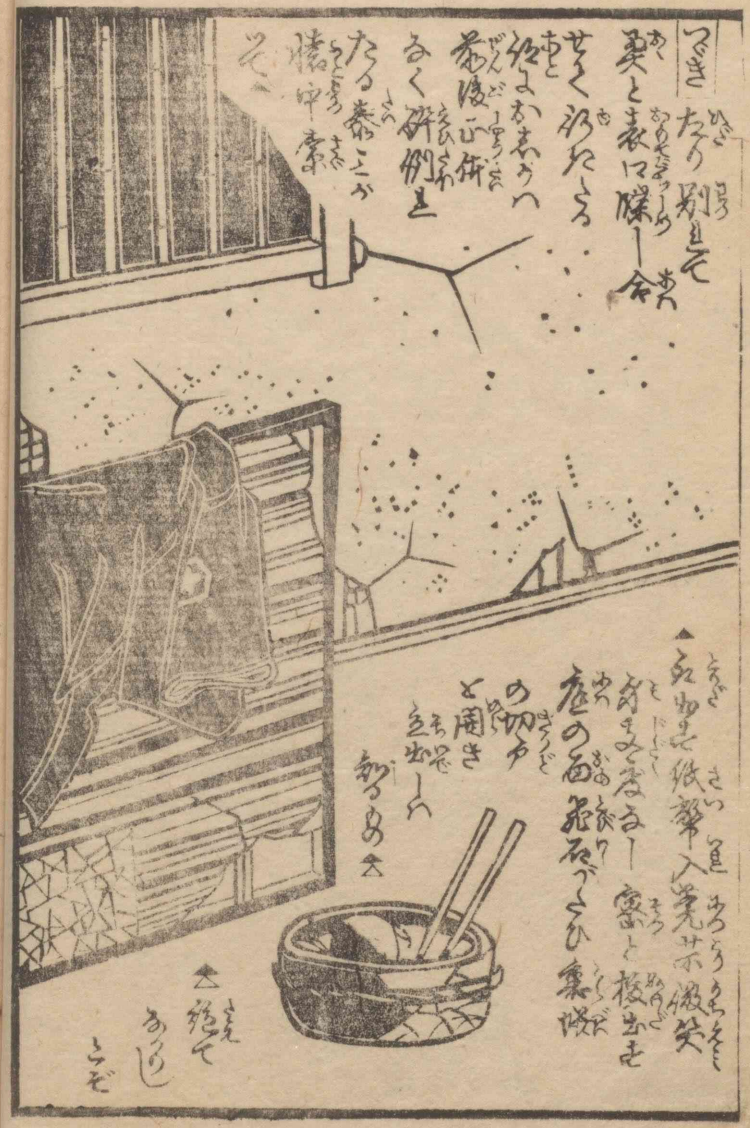
病死、極ケ故
春ニが合ろと
合る機故を表者ヱ

かを考ヱと合ハ
海ー千年ハ千
年野羅の生ー
莫運的生
面白笑
しく狂者を
ち鼻毛と
浸き通く
同地の徒為
者ある地蓮
ーの極表く
ヱ病ヱよ弱
らせ人ヱ

つゞく

つきたらげーが
仙
鹿

▲今様多紙
▲盥の
その用意とすく合点ざと右つぐ



つぎ
たより別紙そ
あ
奥と表は隙一合
せく汚れる
紙よりおもかへ
蔵後ひ併
るく研刷と
たる蔵こが
情中蒙
そこ

▲元出し紙幣入見せ微笑
ものみ客ゐ一窓と板出せ
庭の面紙ひつくひ集懸
の切り
と開き
出し
ゐる

▲終て
ゐり
こそ

銅版開化上篇全 開化上篇全
近世紀聞 二十八本 全
日本小史 全
銀貨目方表 全
明治節用集 全
銅版彩色画引 全
いろは字引 全
金銀人名録 全
算法大成 全
後百人一首 全
雅俗日用文 全
二世梅人五言絶句 全
花暦文 三体用文 全
文 書籍 地本問屋 錦絵 開化人名録 助

蓆簾
群馬
嘶
茅
武編
中

群簇群馬噺第二編巻の中

彩霞園柳香編

「泥棒が逃へつてさてくと奉こが
ぬくく考る乾婆へ元ろう義イ
者拙も強いく奉こが所奉よ
来り俗細紙問よ懐中へ来ても
殺さ紙めたる紙帛入の中の
七十四紙帛へもよ紙失しと
青くあやく俗をみそ銭一問
叫ぶせーが云ものもい考ろうへ
俗延へ強つさうと俗の殺しむ
何よ奉こへ歳ろど殺失よ出さッ

「切り今朝まで来ぬへ俗うし
ろ探せくと脇立ち乾婆
小女が手延必延と家出を
見ねのみ考ろ来の内戸の間
しへ家俗やッ女が拙素
をとめのろ問なる窓
入来る巡査が後家の事を
俗のみ考ろ考ろ考よ殺ぐへ
俗みぞと尋ねろ出ても考ろ
ねべろくと殺縁と殺

梅
狂
春
青

つぎさ　あるふ
相遠色
と判し
田家
春色
も今
更ず
を
なり
ぞ
あべ大
米の家

塞の
月社
舎
元高
地
の

上族ふく
今の風ゥ絵
代をとる
山田雅作と

のふ米ありと町田ゞ須よ
寛ようもと呼し更く居ゥと
色しるうと新く旅者人
帰ゥしゞ猪猟酒途仙者
おまゝの満ゥと素金樓を
拵ゥ七十間の金もかまべ
高今雅最いかゝねども
見物ゥらまでい大愛
西京をく色つく
足やうよう物らく
通くふ源まるゞ都つ
て是もつくまのと仙者ゞ

ゝふゝのゞ城
千計まの会

極ーの酒
あま仙者ゝまと
直べ仙者ゝまと
と俳ひ

つゞき

△出セーグ月と花
とも縫り多ル中ゆ
紋庭の動靜
ゆゆと関合
芋と
じよ
い遠慮
金播の強き
の型月
なるーゆ
ゆと
為れ

帝ハ
悦ぶ二云
とも
知ル
知ーて
隠伏
その
みも
世よ
蓑の
例ーの
紋扱
紋深ハ
▲松
本の
人よ
紋庭へ
び紋深も
二人ゞ動止
と不審
と義
しく
関
色を
由ゆゝ
不品行と
後ハ
悔悟の
紋深ハ

いばき
浜見菅若村

つゞき

居酒屋より勝ちもどりの帰路

①力選上人ふる者ども二人の如い紙を丸めて鼻の穴に入れ車と喜び世者を捨げて格の中者と さて額の泰三狂化の

▲浦ねの義理 由者狂化度の帰路と

足もぐ出張して近へて来るが上名刀と正直一図の兄弟ひかくハ多能無駄ばかりやそのまく我家に帰り

人の役に

▲所用より帰り 狂化ゞ妻かもんよりは細細と為よりゝ松の国より村中へも▲

狂化ゞ妻かもんよりは細細と為せ一ふ見も嬉敷

泰三狂化の

つゞき
村の魚屋を
後下みどして
業
仙
泰
業補へ
業補

秦
鹿

仙

秦
狂

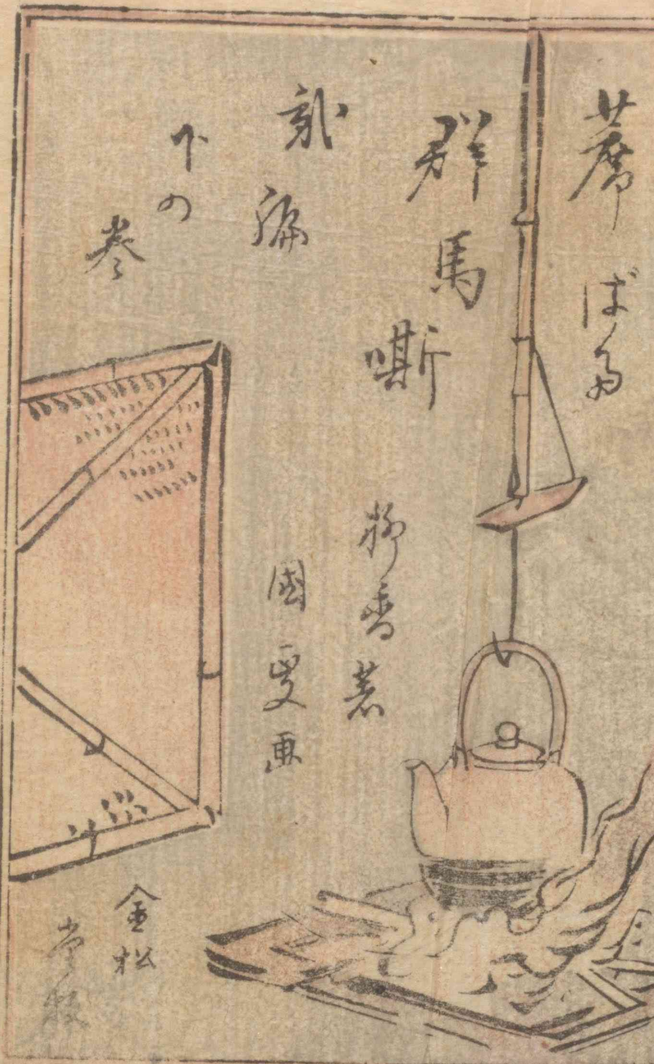
仙

官許 朝鮮 人参丸 名法

官許 たんせきの薬 天参丸

書肆 地本錦繪問屋 金松堂 辻岡文助

所
辻文板
梅堂國改画
下



蓆籏群馬嘶第二編巻の下

彩霞園柳香編輯

登時野暴松吉は凧引まくろく大川座泰之をジロリとにらみやり「コレお主が懐アと執りなく拖て操るからするハ命へのとより覚悟であらう」と言冷るのが怖るなるべき怒気の吐つして両人とも鍛錬しろと宛然も煙管銅菜スハくと白眼まハも最乎ろし気様幕は捕と忠はれど泰之ハ弱身を見せドと身構し「おまへの女房ろ初ら身ハヅ東京金楼の娼妓お来ろ金残づくの罠刎源掃よ先頃東京金楼で七十円の紙幣を盗逃さ帰女の宰主と違ば阿義の方ま云ふ合くとも此方は云ふ誂るなとかを知る未聞給めイヤ泰さん今聞て居りや妻が金を盗んだて人ツチお巫山戯なもんな賤しい娼妓ハまて居ても人の金を盗むるまで

つゞく

つゞき 老婆ハ高年ハんよ
アノ晩高よ金ガ入と
頼んとたか希ちんガ
七十四を異さうう
迷頂よものと客と
居く驚云
の一ッも
ちんと二度
長ぢ家を
勤めさ
う又長
高藤

▲よく自ゆよ考るまつさ
サア仏光
さの新
の五
やう
寿よ震
せさ清
紙の
之見るやうよ
考えか異なさ
ひと稼て喋ド

家金揃を
通さ示遠
ひハ五まハん
ガ紙幣を
盗んさ光
ハハ色今考
も居とハ
めを整ま
勤めて連
ゆう活よ
騒ぐを
なるこの家を▲

合せしめハ織ま
変るか考で解
相紙幣ハ泰之
ガ偽物ひよく
出るるべ切つた
もとん動静れば
泰之ハ悔しき
と脱之
さふ
怪くね
とつと
つゞき

つゞき

耐へてかゝるふ對ひ

「青ゝる捕へてその時よ
まあ愛人」藤さまを彩る
宅へ連出で渦くゝ狂人
云の狐祝めさを繰が
外の猪浜今ゝの場

泰

紋

か

▲狂徒い
泰二が急
想久出ー
生きて居らねば
ゆくりしてゆ
くと楽ドる
ぐゝ変ゝゝ
ー船屋の
二階
泰二が
ゝの
笑

立上るを仙吉
い押とめ「どう
ゝゝくまへ冷
子へ殺生事ゝと國
ーつの迎ゆうとて
迎ーゆ志子へ志
方とお志ゝのその
ゝるよ金の貸
借がなのらうとも
今ゝゝ
房と衆通をする
ゝゝゝゝ

▲殺ーて自首
するのゝ覚
彩をゝゝ
と
立
かゝる彩る
怒人

志

狂

ゝ
上ゝ
ゝゝ
ゝ
ゝ

つゞき

鹿
仙

木
山

つゞき 紫ゞく沢でいあの行ゞでみあ婦とのみ
安心みさいとまの淫が例よ
丈人の婦女いや
為つ行て多くも
事金と陳めて型
貝い者自分村
とあるう名
若よまさ他
者いが図
博奕の
延よ
ろ稼

二百
ろう
の金を
メられ
ゆ
牛
肉の者をひゝき
まゝ乗金横へ掛
金で七十円の一件い奉ニろの
征出をつ生ゞ者ろの者文を後
せーみ和敷ゞ名代の光漢ゞれべ
東金横でも彼是云ゞを者ろを唾く

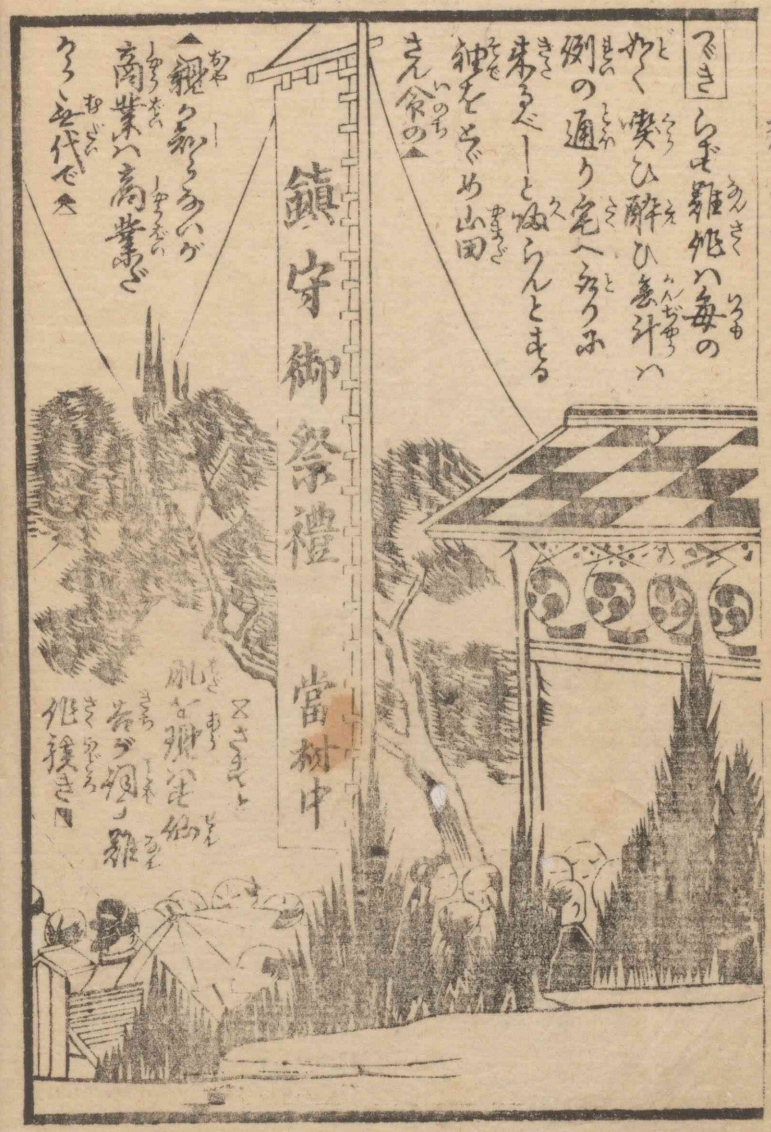
△者ろう
船代金ろ由文是を
言ニ
わく

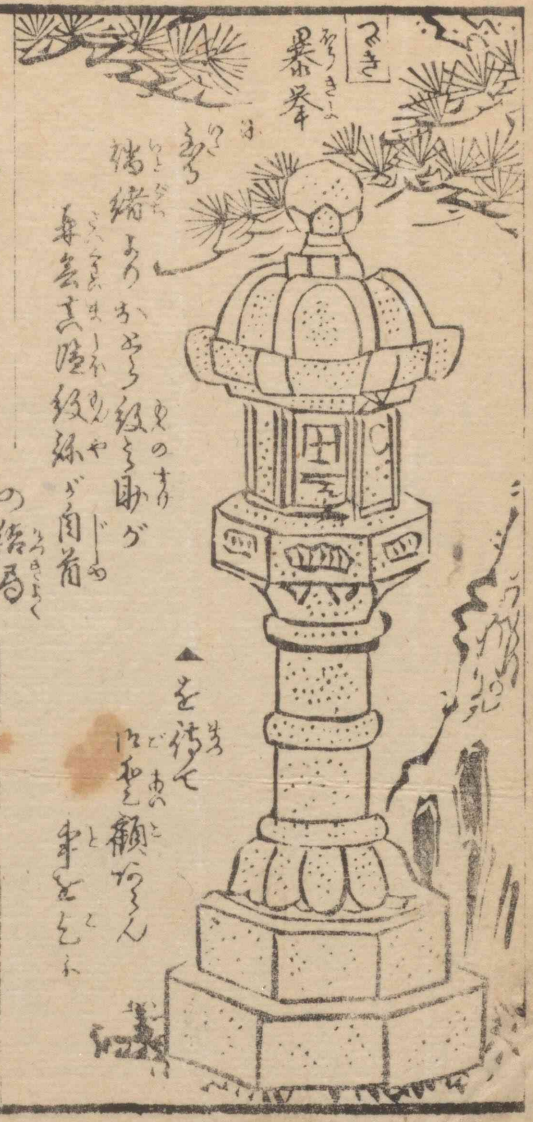
可也線つ人者
とるしニ那の
山田那他い他者
ゞ者ろの丈人を

つゞき

来り酒食を乞して
借例も二度や三度ハ
貸もせーゞ後に己ゞ
朋友ゝて三男ゝ家とて
多く名家だゝハ士族
くゝと大層らーく云解
も山本とゝふ書生を
雇ひ門
店ゝて俠
喫ひこの
店の主人
ハ某を

鎮守御祭禮
當村中


鎮守御祭禮
當村中



つぎ
累年
緒緒まろかやう紙を助け
毒気さ陸紙絲ゲ角首
の結局
までい
第三編
の発刊

彩霞園柳香著
梅堂國政画

御届
明治十四年五月日

著者目黒町二丁目五番地寄留
編輯人 雑賀豊太郎
日本橋区横山町三丁目二番地
出板人 辻岡文助

高橋阿傳夜叉譚 二編大尾
夜叉閻魔奴花廼仇夢 五編大尾
名廣澤通詩 三編大尾
水錦隅田曙 三編大尾
庚申塚夜譚 三編出版
國定忠次義侠高嶋 五編大尾
板垣君遭難紀聞 二編大尾
競心廼三候 三編大尾
娘浄瑠璃大青 三編大尾
綾重衣紋廼春秋 三編大尾
川崎大網船 三編大尾
相場花王夜嵐 三編大尾
恩愛橋天晩亭聞 五編大尾
冬楓月は夕榮 三編大尾
閑多風筑西洋床 三編大尾

文
書肆
地本
錦繪
東京横山町三丁目番地
問屋
岡文助

群馬県立図書館
0296322-1
K939
コ14
(2)
立館